

中国人のものの見方・考え方

～ 日中関係の理解にあたって～

環境委員会調査室

すぎもと かつのり
杉本 勝則

1. はじめに

日本と中国の関係は「一衣帯水」とも言われるように、距離的には非常に近い関係にあります。身体的な特徴も似ており、都会的なファッションに包まれた中国人と日本人では区別が付きませんし、中国の街を歩けば目に入る看板は漢字で書かれているので、その意味は分かったような気になります。また、文化面についても日本人に馴染みの深い『お経』は中国語で書かれていますし、『論語』や『三蔵法師』は日本人の誰もが知っています。食について言えば、週に何度かは中華料理を口にしています。

このようにあまりにも近しい関係にある中国であることから、得てして日本人は中国が外国であることを忘れてしまいます。外国人であると思えばなんてことはない、ちょっとした考え方や習慣の違いにまで激しいアレルギーを起こしてしまいます。

日中関係を理解するには、まず、両者の違いを知ることが必要です。本稿ではそれらを述べてみます。

2. 文化面の違い

(1) 凸型文化圏と凹型文化圏

中国の歴史は、漢民族による中原の支配と北方の騎馬民族による漢民族の支配の歴史ですが、騎馬民族による支配もやがては農耕民族である漢民族の文化に同化されていくという歴史でもあります。教科書的な説明では、攻撃的ではあるが少数者である騎馬民族が、受け身的で穏やではあるが大多数の農耕民族の文化に飲み込まれ、次第に独自の文化を失っていくというところです。この考え方によると農耕民族が大多数を占める中国と日本や韓国は、同じ農耕文化を共有するのですから文化的にも共通していて良いはずですし、ものの見方、考え方も似ていて良いはずですが、筆者も実際に中国人や韓国人と接するまでは同じ農耕文化の下で同様のメンタリティーを共有するものと思い込んでいました。しかし、実際に中国人や韓国人と接してみるとメンタリティーの面においては中国人と韓国人とは似ていると感じることが多いのですが、両者と日本人のメンタリティーは明らかに異なると感じることが多くあります。

この点を研究されている東京工業大学名誉教授の芳賀 綏（やすし）氏によると、アジアの文化は乾燥アジアの大陸文化と湿潤アジアの大陸辺縁・島国文化に分けられ、前者は対立型、攻撃型の凸型文化（動物支配型文化）で、中国や韓国等の内陸アジアの国々がこれに属し、後者は協調型、受身型の凹型文化（植物性文化）で、日本や東南アジアモンスーン地帯の国々、西・南太平洋の島々が含まれるとされています¹。

そして、その文化の特徴としては、凸型文化では原理原則が重視され、欧米流の二者択一の『選びの文化』、『愛と憎しみ』の文化であるのに対し、凹型文化では、曖昧さを尊ぶ『合わせの文化』、心情主義的で『しつこさ』のない、過去のことは忘れやすい文化だとしています。筆者はアジアの国々を隈無く見て回ったわけではありませんので感覚的にしか賛同できませんが、世界を股にかけるビジネスマンや外交官に聞いたところでは概ねこの説に賛同していました。

近時、小泉総理（当時）の靖国参拝をめぐることは小泉総理（当時）の主張と中国、韓国の主張が平行線をたどったままですが、その各々の主張を冷静に分析してみますと、芳賀先生の指摘されるような日本人の文化的感覚と中国人、韓国人との文化的感覚のズレが問題の根元にあるのではないかと思うことがよくあります。筆者は、今夏、中国北部の地方都市で地元中国人達とこの問題について懇談する機会を得ましたが、このことを強く感じました。

靖国問題について付言しますと、筆者は日本人と中国人との間では死者に対する考え方に大きな違いがあるのではないかと考えています。日本では悪人やどんなに責任のある人でも死ねば「仏」であり、「神」であり、死者のことについては悪く言わないのが文化のようです。しかし、中国のような凸型の二者択一の文化においては、生前に悪人であった者や責任のあった者は死後においてもその評価が変わるものではなく、悪人は悪人であり、責任者には責任があります。中国では、金の支配に融和策をとった南宋の秦檜は900年近く経った現在でも民族の裏切り者として、その夫婦の彫像に人々は鞭打っています。また、抗日戦争時の南京政府の王兆銘（その人物像については再評価の動きがありますが）の墓については、後の破壊を恐れコンクリートで固めたものの、ダイナマイトで破壊されています。筆者は多くの中国人にこの死者に対する日本の文化についての考えを聞いてみましたが、皆、理解できないようでした。

近時、在日の中国人数も50万人を越え、日本人と中国人の交流は益々盛んになっています。日中間の交流を考えるとこの文化の違いを認識することが益々重要になってきますが、中国的常識と日本的常識のトラブルについては、北京大学の尚会鵬教授等著の『中国人は恐ろしいか！？』（三和書籍）に詳しく書かれています。題名のセンセーショナルさに違わず面白く読めると共に、内容的にも優れたものなので一読をお勧めします²。

（2）文化的相違の体験例

日本に留学している中国人学生と付き合っていると、最初は日本的感覚に反発を覚えるものの日本人の律儀さや真面目さ、正確さには感動を覚え、日本の良いところにも気づいてくるようです。そして、中国に帰る頃には日本的中国人？になっているので、帰国後は現地の中国人との文化摩擦？に悩むようです。しかし、細々とした日本の慣習の中には日本人が敢えて指摘しないと彼らが気づかないものも多く、日本人にとっては不愉快なものであっても、彼らにとっては「なぜ？」と思うようなもの

もあります。それらについては日本人と中国人が共に気づかないまま、日中間の摩擦に繋がっていくものもありますので特に注意が必要だと思います。

筆者の経験したことから事例を挙げますと、日本では食事をご馳走になったり、プレゼントをもらったときなどその場でお礼を言うと共に、次回会ったときや電話したときには「先日はどうも」と再度お礼を言うのが習慣となっています。そして、これを言わないと感謝の気持ちが伝わらない様な気がしますし、反面、これを言ってもらわないと何か不満でもあったのかと心配になってきます。しかし、一般的に中国ではお礼はその場ですらだけで、次回会ったときなどに再度お礼を言う習慣はないようです。この習慣の違いは小さいようですが日本人側には結構堪えます。中国人には感謝の気持ちが無いと思ってしまうのか、日中関係の記事を読んでいるとこの種のトラブルを結構見かけます。彼らからしてみれば感謝の気持ちは、世話になった時点で表しているのであり、後日、再度お礼を言うことの意味が分からないと言うところでしょうか。このことは決して中国人が感謝の気持ちをもっていないのではなく、後日、別の形で感謝の気持ちを表してくれることが多いようです。

中国も近代化されるにつれ徐々に人間関係も希薄化しているようですが、それでも客人に対する持て成し方はそれこそ「熱烈歓迎」です。これは、台湾でも体験したので中華民族の伝統かも知れません。場合によっては何日も職場を休んでの密着歓迎となりますので、こちらが心配になってきます。このように歓迎してくれることは嬉しいことですが、問題は彼らが日本を訪れた場合です。彼らの感覚では日本人も同じように熱烈歓迎してくれると思っていますが、現在の日本では職場を何日も休んで、友人、知人が総出で歓迎するようなことはまずありません。そこで、彼らの日本人に対する印象は、「日本人は不親切」ということになってしまいます。この問題も客人に対する文化の違いであると思います。日本もかつては客人の持て成し方が熱烈歓迎型であったことからするとこの問題は近代化と文化の関係なのかも知れませんが、筆者はこの場合の対応策として、中国からの客人に対しては「日本の習慣では仕事を何日も休んで密着歓迎することはない」旨を説明し、できる範囲での歓迎をしています。いろんな場面においても習慣の違いを説明すれば納得してくれると思います。

日本が国際化していく中で、我々は色々な国の人達と色々な文化、習慣に接していきます。そこには言葉の壁の問題がありますが、お互いの文化や習慣の違いを話すことによってお互いの見えない不満の芽を摘むことが可能です。筆者は、文化や習慣を越えたところの人間としての本質は世界各国共通であると思っています。だからこそ、お互いの文化、習慣の違いを知ることが重要になりますし、そのためには、まず、自国の文化、習慣を客観的に知る必要があると思います。

3. 言葉の違い

(1) 漢字文化圏の罨

中国の町中には漢字の看板が溢れ、初めて中国を訪れた日本人でも漢字を見ながら何とか旅を続けることはできます。種子島にポルトガル船が漂着したときも中国人乗組員と島の僧侶の間で筆談でのコミュニケーションが成立したので鉄砲が日本に伝わりました。このように日本と中国はお互いの言葉を知らなくても漢字を媒介に意思疎通をすることは可能です。しかし、これはあくまで可能性の問題であって日本語と中国語は異なる言語です。中国語と日本語では漢字は同じでも異なる意味のものは数多くあります。中国で「汽車」に乗ろうと思ったら「自動車」であったり、「手紙」を欲しいと言ったら「トイレットペーパー」を渡されたりします。ある雑誌記事でカゼをひいた記者がそれを相手に伝えるために筆談で「風邪」と書いたら分かってもらえたを書いてありましたが、カゼをひくのは中国語では「感冒」で「風邪」と書いても中国人には？です。雑誌記者に「風邪」と筆談された中国人は意味も分からず首を縦に振ったのでしょうが、それを理解されたとは勘違いしたのは同じ漢字文化圏の罨の一つでしょう。

この問題に関しては通訳の問題があります。通訳にも色々なレベルの人がいますが、日本語としては話の筋が通っているような通訳であっても時として、中国語の意味とは全く違う通訳をしている場合があります。中国に進出している企業で当初は上手くいっているようであっても交渉を重ねるにつれて話が違うではないかと日中双方が言い出すときにこのような例が見られる様です。筆者も徒然草の「仁和寺にある法師」ではないですが、通訳が日本語の意味がよく分からず、全く違う場所を名勝地として案内された経験があります。同一文化、同一言語の中で育った日本人は言葉が通じなくても何となく「以心伝心」で伝わったような気になりますし、通訳についても未だに語学屋的な発想がありますが国際間の交流が益々盛んになってくる今日、語学の重要性は益々高まりますし、通訳の重要性も高まっています。そして、語学についても文法や発音の教育も大切でしょうが、それ以上に、下手でも意思疎通ができる語学教育に重点を置くことも大切だと思います。

(2) 「ご迷惑」の中国語訳問題

「手紙」を要求したらトイレットペーパーが出てきたり、「風邪」をひいたことが通じたと思ひ込むことなどは笑い話ですむことですが、言葉の意味の違いが日中間の歴史的大事件に発展しかかった例もあります。

1972年、日本と中国は国交を回復しましたが、その交渉開始にあたっての周恩来首相主催の晩餐会でのことです。この席で当時の田中角栄総理は日本の中国侵略に対し「過去数十年にわたって、日本が中国国民に多大の『ご迷惑』をおかけしたことに、私は改めて深い反省の念を表明する」とあいさつしました。このあいさつを日本語で聞く限りにおいては我が国の深い反省の念は伝わります。ところがこれを中国語に通訳したときに問題が発生しました。当時のニュース映像を見るとその瞬間、周恩来首相の顔色がサッと変わるのが分かります。日本語の『ご迷惑』にはごく軽い

意味の『迷惑』もありますが、非常に深い遺憾の念を意味する場合があります。記録を見ると親台湾派が多かった当時の政治情勢下においてこの『ご迷惑』は、外務省が考えに考え抜いた表現であることが分かります。問題はこれを中国語の『添了麻烦（ティエンラ・マーファン）』と訳したことです。確かに中国語辞典では日本語の『迷惑』は中国語で『麻烦』とあります。しかし、この『麻烦』は女性のスカートに水をかけてしまった場合に『済みません』というようなニュアンスの『迷惑』です。通訳の言葉を聞いた途端に中国側の顔色が変わった訳です。因みに中国語での『迷惑』は日本語では『迷う、惑わす』の意味で迷惑をかけるというような意味はありません。ここに同じ漢字を用いる日本文化と中国文化の交流の難しさがあります。

この日中国交回復交渉は、あわや決裂という危機もありましたが、田中角栄、周恩来、毛沢東という当時の巨星達の日中国交回復に懸ける情熱と人間的度量の大きさによって成功しました。その間の経緯については、矢吹 晋横浜市立大学名誉教授の最近の研究がありますが、政治家にとって必要な資質とは何かについても参考になりますのでご一読をお勧めします³。

4 . 社会制度の違い

日本と中国との違いについては、今まで文化的な問題について述べてきましたが、それ以上に厄介で、現実的な大きな問題として社会体制・制度の違いがあります。この違いを認識しないまま日本や欧米諸国の制度を前提に中国を論じる議論も多くありますので注意が必要です。

(1) 社会主義的制度

言うまでもなく日本は資本主義国家であり議会制民主主義を採っていますが、中国は社会主義国家であり民主集中制をとっています。これは、両国の憲法を読めば明らかかなことです。最近流行の言葉で言うなら日本と中国とは「価値観を同じくする」国家ではないわけです。しかし、価値観を同じくするはずの議会制民主主義国家間でもその内実は千差万別ですし、これは、社会主義国家間においても同様です。価値相対性を本質とし、一番マシな制度（チャーチル）が（議会制）民主主義なのですからステレオタイプの価値観でその国を決めつけるのは危険です。また、これとは反対に、一部地域の繁栄ぶりや経済活動の実体、W T Oへの加盟をもって中国はもはや資本主義国と同じだとして先進資本主義国の経済理論や金融理論をそのまま中国に当てはめることも危険です。実際にどのような制度がとられ、かつ、それがどのように運用されているかを見るのが重要です。

中国では長い間「単位」社会主義がとられていました。「単位」とは国营企業や大学等の職場を指しますが、日本の会社よりも広く、会社を中心としたコミュニティーのようなものです。そこでは勤めるだけでなく住宅も社会福祉も老後の面倒まで見る文字どおり「揺りかごから墓場まで」面倒を見てくれる自己完結的な職場です。だ

からこそ軍隊である人民解放軍も軍事組織のほかに商売をするための企業をもっていましたし、大学においてもそこで消費される食料等を作るための農場・工場がありました。この単位制度では職場は賃金だけでなく住宅、福祉、年金まで払うわけですから高コスト体質となり、国際競争力確保の観点からは問題があります。改革開放後は順次「単位」を日本の会社や大学のように福祉等とは独立した形に移行していますが、制度的に移行していることが実体面での完全な移行を保障するものではありません。例えば、中国での産学連携については清華大学が大規模で有名ですが、同じ産学連携であっても沿革的にも実質的にも大学とは別個の組織体である企業と大学を結びつける日本の産学連携とは随分と異なっています。清華大学においても学問と企業とは切り離されていますが、中国には単位制度という独特な制度があることを知った上で中国の産学連携を見ることが必要です。

ここ数年来続いている人民元の切り上げ問題を見るときにも注意が必要です。最近ではさすがに中国の事情が分かってきたのか人民元の即時大幅な切り上げを予測する論調は影を潜めています。当初の切上論者の論調には中国にはあたかも先進国と同様の洗練された金融市場が存在しており、そこに金融理論を適用すればこの結果になるというような議論が多くありました。そこには日本もかつて経験した国家の発展段階に応じた金融政策という歴史的視点も欠けていましたので、予測は当たりませんでした。中国の現実をよく知る金融専門家によると、中国においては制度的な金融市場はあるものの、まだまだ、金利差による資金の運用よりも「人治」による資金の運用が幅をきかせているとのこと⁴。人治の問題は人間関係を大切にするという中国人の国民性もあると思いますが、それ以上に社会主義体制における権力の運用がどのようになされているのかという本質的な問題にも起因していると思いますので注意が必要です。

(2) 制度的矛盾と国民性

中国を初めて訪れる旅行者は北京や上海の近代化された町並みと高層ビル群に圧倒されます。また、ホテルについても一流ホテルに泊まりますと細かい点での不満はあっても快適に過ごせます。これも現代中国の一面です。しかし、一歩、北京や上海を出て内陸部の地方に行きますと事情は異なります。ホテルではそれなりの忍耐が要求されますし、ベンツやトヨタと共に馬やロバが活躍しています。発展地域と内陸部との経済格差には著しいものがあり、それらの地方に行けば、中国人が「北京や上海は外国」と言う意味がよく分かります。

また、同じ中国人でも都市住民と農民ではその地位に大きな差があります。中国では戸籍が「都市戸籍」と「農村戸籍」に分かれており、戸籍間の移動は原則として認められていません。農村が豊かであれば問題がないのですが都市と農村の経済格差は広がるばかりです。更に都市戸籍の者には社会保障がありますが、農村戸籍の者にはこれがなく、戸籍制度がいわば身分制度になってきています⁵。都市戸籍の者だからといって安心はできません。公的な社会保障は不十分です。前述したように都市戸

籍の者が受けていた社会保障も単位制度が解体される中で受けられなくなっている例が多く見られます。また、一人っ子政策がとられているため日本以上の急激な高齢化社会が進行し、将来の保障が受けられるかどうか分かりません。最近、マスコミでも中国における貧富の格差（ジニ係数で0.45とも言われており、日本では2.26事件に至る頃のジニ係数に相当するようです）や農村における高齢者の悲惨な生活が伝えられていますが、これも現代中国の紛れもない現実で様々な矛盾を抱えています。中国人がよく言う日本ほど成功した社会主義国はないというのもあながち冗談で言っているのではないのかも知れません。

また、中央集権国家である中国においては「お上」の威令が隅々まで行き届くようなイメージがありますが、長い中央集権の歴史の中で「面従腹背」「上に政策あれば下に対策あり」の歴史が息づいているのか、中央政府の意向が自分たちの利益に合致すれば指示に従いますが、利益に合致しないときはのりくらりと指示に従わないようなことがあるようです。中央政府は格差の是正や農村の安定について地方政府に多くの指示を出していますが、地方政府はこの指示に反して格差の是正を怠るだけでなく勝手に税を取り立てたり、農民の土地を取り上げたりしていることもあるようです⁶。怒った農民が地方政府に対し暴動を起こしたことなどが時に報道されることがありますが、全国規模にわたる農民暴動は中国政府が最も恐れることですし、マスコミ報道を規制していますが、これなども中国歴代王朝の交代史をひもとけばその理由が分かると思います。

中国に対する最近の日本のマスコミや有識者の論調を見ていますと、社会格差の進行や農村の混乱を強調するものが多く、中にはすぐにでも大規模な混乱が起こるような論調のものもあります。確かに今の中国の格差の現状は、豊かさを経験した日本人から見れば耐え難く感じるものが多くあり、すぐにでも暴動に発展しそうな気がしてきます。しかし、中国が豊かになってきたのはここ10数年間のことです。格差については著しいものがありますが、人々の生活の質は着実に向上してきています。内モンゴルの草原に点在するパオ（遊牧民のテント）の横には衛星放送受信用のパラボラアンテナがありました。そこの町の朝市には一目で偽物と分かるブランド？衣料と口バに引かれた荷車には山積みの農作物があり、人々の活気ある声が響きます。歩道には屋台が並び朝食を忙しく買いに来る人々がいます。そこにはいつもの中国がありました。まだまだ貧しいですが、暗い感じはしません。むしろ「民工（農村戸籍の都市労働者）」問題のある北京や上海の方が表の華やかさに反し、暗さを感じます。そして、日本ではこの暗さを強調した報道がなされています。ただ、筆者がいつも思うのはこの暗さに対しても日本人と中国人では受け止め方が違うのではないかということです。日本人は物事が少しうまくいくとすぐに楽観的になりますが、うまくいかないとすぐに悲観的になります。マスコミが煽るせいも国民はいつも楽観と悲観の間を揺れ動いています。この点、中国人には長い抑圧の歴史があったせいなのかどうかは分かりませんが「没法子（メイ・ファーズ、仕方ない）」に代表されるような忍耐強さ、

したたかさがあるように思います。豊かさの中にある日本人から見れば許し難い格差であっても彼らからすれば案外「没法子」なのかも知れません。長かった「没有（メイ・ヨウ、何も無い）」の時代に比べれば今は曲がりなりにも何でも「有（ヨウ）」ります。貧しさの中から這い上がろうとする者のもつ逞しさがそこにはあるように思います。

日本にはプラス面、マイナス面を問わず数多くの中国に関する情報が流れています。そして、その情報の多くは真実であろうと思います。しかし、それらは中国の一面を語るものではあっても、全てを語るものではありません。中国をみるときには、価値論や概念論に拘泥された中国でなく、ありのままの中国を見ることが必要ですし、徒に楽観論、悲観論に走るのではなく、歴史的視野、中国人的発想に立ってこれからの中国がどのように変わっていくかを見ていくことが何よりも大切だと思えます。

-
- 1 芳賀 綏『日本人らしさの構造』（大修館書店 平 16.11）
 - 2 尚会鵬、徐晨陽『中国人は恐ろしいか！？』（三和書籍 平 14.7）
 - 3 『田中角栄の迷惑、毛沢東の迷惑、昭和天皇の迷惑』21世紀中国総研ホームページ
http://www.21ccs.jp/china_quarterly/China_Quarterly_01.html
 - 矢吹 晋『日中の風穴』（勉誠出版 平 16.8）
 - 4 大西義久『アジア共通通貨』（蒼蒼社 平 17.1）
 - 5 王文亮『九億農民の福祉』（中国書店 平 16.11）
 - 6 杉本信行『大地の咆哮』（PHP研究所 平 18.7）
富永文朗「中国農民運動に関する一考察」『立法と調査』260号（平 18.10.6）